

---

# 「姉が欲しい……」 三兄妹の長男談

ユキヤナギ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「姉が欲しい……」 三兄妹の長男談

### 【Nコード】

N4816R

### 【作者名】

ユキヤナギ

### 【あらすじ】

美人の姉が欲しかった高校二年生の主人公と、個性的過ぎる高校一年生の双子の弟と妹が繰り広げる、ゆるい日常会話コメディ。タイトルの姉欲しい発言、本編とあまり関係なかったり……。

『注意』この作品はほぼ会話のみで成り立っている、小説と呼べるのかすら怪しいものです。怖いもの見たさにどうぞ。

## 俺の部屋のエアコン（前書き）

### 登場人物

俺：翔（シヨウ）・高一・弟と妹がいるが実は姉が欲しかった

弟：彰（アキラ）・高一、優とは双子・学校での渾名は『風呂で死海を作った男の弟』

妹：優（ユウ）・高一、彰とは双子・兄妹ゲンカにおいては最強、得物は『孫の手』

## 俺の部屋のエアコン

俺「もう3月なのに、まださむいなあ」

弟「暖房つけよう」

妹「それがいい」

俺「んなつ！？いつからいたんだお前ら！」

弟「兄貴が部屋に入ってくる前から」

俺「怖っ！」

妹「あんたらが入ってくる前から」

俺・弟「怖っ！！」

俺「つていうかさ・・・」

妹「リモコンは？」

弟「あそこ」

俺「ここ俺の部屋なんだが」

弟・妹「なにを今更（笑）」

俺「何しにきた．．．！」

弟「いや、俺の部屋汚いし」

妹「自室で独りとか寂しいし」

俺「俺の部屋は避難場所か!？」

妹「居たらダメ？」

俺「別にいいけどさ．．．」

妹「アリガトウ、オニイチャン（棒読み）」

俺「ドウイタシマシテ（棒読み）」

弟「ありがとう、おー」

俺「お前は喋るな」

弟「酷くね!？」

妹「．．．なんか寒くない？」

俺「ん？．．．確かに」

弟「お前が暖房さつきつけたんじゃないの？」

妹「そうだけど、なんか．．．」

俺「段々寒くなってきたくないか？」

弟「リモコン貸してみろ．．．え。」

妹「なにになに？．．．あ。」

俺「どうした？」

ちよっww冷房になってるやんwwww

弟「早く！暖房に切り替えろよ！」

妹「私がやる！冷房にした責任はちゃんと取らねばなるまい！」

俺「語尾どうした」

妹「キエエエエエ！！？」

弟「怪鳥みたいな声をあげ始めた！」

妹「ボタンが引っ込んだまんま、出てこなくなった．．．！」

俺・弟「なんてこつたい＼（＾o＾）／」

俺「貸してみろ！．．．これは」

弟「電源と運転切り替えボタンの両方が引っ込んでる！？」

妹「なんという奇跡！」

弟「いやいやいや！寧ろ、悲劇だろ！」

俺「．．．つうか、同時にボタン二つこうなるか、普通？」

妹「慌ててやったら手が滑ったの！」

弟「手が滑ったってレベルじゃねえぞ、これ！」

妹「もう、そんなに責めないでよう．．．」

俺「まあ、過ぎたことをいっても仕方ない。」

妹「兄ちゃん．．．」

弟「え。なに、この俺だけ悪者みたいな空気」

俺「（これでお前は嫌われたな、フヘヘヘ！）」

弟「（兄貴iiiiiiii！！）」

俺「でもさ、引っ込んだ時に一応ボタンが反応したんじゃないの？」

妹「エアコン、まだウィンウィン言ってるよ？」

俺「え！？なんで？」

弟「二回、間違えて反応したとかじゃない？」

俺「マジか・・・」

妹「あ。弄ってたら電源ボタン戻った！」

俺・弟「でかした！」

妹「でも、切換ボタンはなんか無理そう・・・」

俺「いいって。自動が暖房に設定が変わってれば・・・」

妹「いや・・・。設定が「送風」になってる・・・。」

一同「・・・。」

俺の部屋のエアコンは  
夏は温風、冬は冷風が出る、  
お茶目なエアコンです。



## 俺の部屋のエアコン（後書き）

元は短編として投稿していたものを連載として編集し直したものです。

ゆるい日常会話ものを書きたかったんです…。

## 俺の手作りクッキー

弟「ただいまー」

俺「おかえりー」

弟「兄貴ー？帰ってたのー？」

俺「おう。台所にいるぞー」

ガラガラガラ、ボタン

弟「うわあああああああー！」

俺「え、なに！？どうした？」

弟「兄貴がエプロンつけてる…！」

俺「俺かよww」

弟「しかも似合ってる…！」

俺「あ、ありがとう…」

弟「で！一体どうしたんだよ、兄貴！」

俺「まあ、落ち着け。麦茶でも飲め。」

弟「それ、めんつゆだぞ。」

俺「あれ？おかしいな……。さっき飲んだときは別に……」

弟「飲んだのにわからなかったのか！」

俺「味見のし過ぎかな、hahaha」

弟「何、食ってたんだ……」

俺「それよりいいときに帰ってきたな。お前には是非食べてもらいたいものが――」

弟「いやだ」

俺「えー……」

弟「今の会話の流れでYESなんていえねえよ！」

俺「俺の自信作だぞ？」

弟「兄貴が作ったの？」

俺「じゃーんっ」

弟「かわいいな、出し方」

俺「一口クッキー」

弟「お？以外とまともじゃん」

俺「食べてみるよ」

弟「まあ、一つくらいなら。……………」

俺「どう？」

弟「…うまい」

俺「よっしゃ！」

弟「でもなんでこんなの作ったの？」

俺「ホワイトデーのプレゼントの練習」

弟「へえ、兄貴クッキーあげるんだ」

俺「前にユウに聞いたんだよ」

弟「何を？」

俺「女の子ってホワイトデー、何喜ぶのかって」

弟「そしたら？」

俺「手作りクッキーとかどうか、って言ってた」

弟「なるほど、それでか」

俺「そういや、ユウもクラスの男子にチヨコあげたのかな」

弟「あげたんじゃない？作ってたし、チヨコ」

俺「あいつに貰った奴、絶対嬉しいよな」

弟「まあ、なんだかんだいつて見た目はいいからな…」

俺「これで性格がよかつたらな…」

弟「そんな事言ってるけど、兄貴あいつに結構あまいよ？」

俺「そんなことねえよ。あいつと同じ位、お前のことも」

弟「え…」

俺「え。」

弟「兄貴…」

俺「アキラ…」

妹「ただいまー。いるのー？」

ガラガラガラ、ボタン

俺・弟「！？」

妹「……。」

…カラカラカラ、パタン。

俺・弟「いやいやいや！無言で逃げないで！！」

ガラガラガラ、バタン

妹「た、ただいま」

俺「なぜ目をそらす。」

妹「兄ちゃん、エプロンよく似合ってるよ…」

俺「ありがとう」

妹「…あ！クッキーだ！」

弟「さすが女子。スイーツに目がない」

妹「これ、もしかして兄ちゃんが作ったの？」

俺「ああ…。ちょっと待て、ユウ。お前は食べるな」

妹「ええー、なんで!？」

俺「お前、俺にチョコくれたろ?だから、お前にはホワイトデーのときに完璧な完成品を受け取って欲しい」

弟「(なんとまあ、くさいセリフを…)」

妹「そっか…」

俺「悪いな」

妹「だが断る」バリバリボリボリ

俺・弟「ですよー」

妹「むん、ぼいひい」

俺「飲み込んでから喋れ」

弟「ほら、麦茶」

妹「(ゴックン) いやそれ、めんつゆ」

俺「そっいゃ、そろそろ母さん起こさないとヤバくね?晩飯」

妹「家にいたんだ…。どこにいるの？」

俺「多分、リビングで死んでる」

弟「そのセリフだけ聞くと、完全にホラーだよな…」

妹「私、蘇生してくる！」

タッタッタッ

俺「頑張れ、ネクロマンサー」

弟「それだと母さん、ゾンビにならないか？」

俺「なあ、アキラ」

弟「ん？どした？」

俺「普通のととは別に、こんなのも作ってみた」

弟「え、なにになに？」

俺「山葵苦鬼い（わさびクッキー）」

弟「口頭では伝わるはずのない何かを感じたぞ、その名前w」

俺「その名のとおり、わさびを練り込んである」

弟「どのくらい辛いの？」

俺「一口で確実に死ぬる」

弟「ちょっとした兵器じゃねえかww」

俺「知り合いに気に入らない奴がいるとする」

弟「おう」

俺「他の奴には普通のを、そいつにだけコレを渡す」

弟「すると…」

俺「完全犯罪」

弟「なんというサスペンス…！」

俺「後にはワサビのツンとした匂いしか残らない…」

弟「残るもん、ちゃっかり残ってんじゃねえか！」

タッタッタッ

妹「お母さん何処にも居なかったよ。もう一個貰うね」

俺「あ！それは…！（皿を取り上げる）」

妹「その程度の速度で私から取り上げられると思ったか」(取り上げたはずの皿を手を持っている)

俺・弟「!？」

妹「(パクっ)おいしい」

俺「…あれ？」

弟「そんなに辛くないのかな?……(パクっ)」

俺「いや、そんな筈は…」

弟「…なんだ、案外そこまで」

俺「おい…?どうした？」

弟「ピイイイアアアアアアアアアア!!!!」

俺・妹「断末魔!？」

弟「水！！水！！」

俺「麦茶ならある！」

妹「めんつゆという名のね」

弟「（ゴキユ、ゴキユ）…はぁ…はぁ…」

妹「何かに憑かれたようにめんつゆを飲み干した…！」

弟「馬鹿だろ！！ 絶対馬鹿だろ！！」

俺「怒るな、カルシウムを取るんだ」

弟「辛いを通り越して痛いよ！脳のシナプス、半分は死んだわ！」

俺「想定範囲内だ。ワサビを丸々チューブ二本使ったからな」

妹「ワサビ勿体ない…！」

俺「自分で言うのもなんだが、ツツコむとこ、そこか？」

弟「身体中の毛穴から汗が止まらん…！」

妹「そっぴゃ、お母さん居なかったよ？」

俺「あれ…？おかしいな」

弟「今思い出したけど、母さん夜に友達と飲み会行くって…」

妹「あ！ 言ってた言ってた！」

俺「マジか。晩飯、俺たちで用意しなきゃいけないのかよ」

妹「でも、今日金曜日だから冷蔵庫に何も無いよ？」

俺「クッキーがある」

妹「足りない！」

弟「いや、足りないとか以前の問題だろ…」

俺「なんなら山葵苦鬼いも」

弟「殺す気か」

結局、父親に仕事帰りに弁当を買って帰ってもらうことにしました。  
しかし、今回の件で判ったことは、

うちの妹、

辛いものに対する耐性が神がかってます。

## 俺の手作りクッキー（後書き）

これも以前、短編として投稿した作品です。  
前回のものより長めにしてみました。

## ラブレター騒動 前編

妹「ただいま！　ねえ二人共いるー？」

弟「リビングにいるー」

俺「同じくー」

タツタツタツ

妹「ねえ、聞いて！　これが入ってたの、今朝私の机の中に！」

弟「これは…」

俺「爆破予告……！」

弟・妹「テロかよ」

妹「どうみてもラブレターでしょ！」

俺「ラブレターだと…！」

弟「今頃気づいて驚く兄貴に、俺が驚きなんだが」

俺「中身は？　見たのか？」

妹「会って話したい、今日の6時に白川公園で待ってます、って

…」

弟「くれた人の名前は？」

妹「書いてない」

俺「なんか怪しいな。誰からもらったとか心当たりあるの？」

妹「うーん…、あ！　そういえばなんか結構私のこと見てくる人がいる」

俺「誰だそいつ！　名前は！」

妹「え…。池上君っていう人だけど…？」

俺「どんな奴だ！」

妹「サッカー部で結構イケメン…」

俺「住んでるとこは！」

妹「学校の近くって聞いたことあるけど…。どうしたの兄ちゃん？」

俺「アキラ」

弟「ん？」

俺「我が家にバールのようなものはないか」

妹「ちよつとちよつと！！ 何物騒なこと考えてんの！？」

俺「いや、なに。ちよつと殺りたくなつてな」

弟「それは絶対警察にお世話になる方のヤルだよね…？」

俺「フフ、俺からしてみれば日本の警察なんて無能よ」

弟「痛い！ 痛すぎるこの人！！」

妹「もしかしてヤキモチやいてんの？ イケメンだから」

俺「はっ、何言つてんだい！ イケメンなんて俺で十分間に合つて  
るだろ」

弟「あんたこそ何言つてんだい」

妹「手紙の主が池上君じゃなかったらどうすんの！？」

俺「真の送り主に向けてのいい練習台になる」

妹「いずれにせよ、池上君に明るい未来はなかった…！」

弟「イケメンであることがそんなに気に入くないのか」

俺「まあ、冗談はさておき。ユウ、行くつもりか？」

妹「それを二人に聞こうとおもつて。どうしたらいいか…」

俺「そもそも愛の告白じゃないかもしれない」

弟「え？」

妹「どういうこと？」

俺「『お前が前のテストの時、消しゴム貸してくれなかったせいで！！俺はあのテストで間違えたところは指で必死に擦って消してたんだよおおおお！！』とか」

弟「知らねえよ！！　つつか、学校で言えはいいいじゃねえかよ！！」  
妹「いや、貸すし、消しゴム」

俺「『おかげで学校での渾名が《黒光りする右手人差し指》に！！』」

弟「その渾名は確かに嫌だ…！」

妹「ねえ、真面目にどうしたらいいか考えてよー」

俺「俺はいつも真面目です」

妹「はあ。やっぱり年齢〓彼女いない歴の兄ちゃんは当てにならん  
な」

俺「ユウ、お前は俺を怒らせた」

弟「沸点低っ！」

俺「そこまで俺を馬鹿にするなら、俺の結婚式の時、お前なんか歌えよ？」

弟「なぜ結婚式…？」

妹「いいよ？　結婚できるならね（笑）」

俺「言うな…。ならその時は『ドナドナ』歌えよ？」

妹「曲のチヨイスが意味不明だ！」

俺「『仔牛』のところを『私』に変えてな！」

妹「屈辱すぎる…！」

俺「『可愛い　私　』　売られて行くよ　』」

弟「それだと人身売買だろ」

妹「自分の結婚式でそんなことされて嫌じゃないの！？」

俺「嫁と一緒に指差して笑う」

弟「嫁、性格悪いな！」

俺「…ということだから、俺は行くべきだと思う」

妹「話の流れが強引過ぎるわ！」

弟「ああ、俺もそう思う」

妹「なんと！ 唯一まともなのは私だけか…！」

俺「いやいや、これは真面目な話」

妹「え…？」

俺「草食系男子とか多い最近、ラブレターなんて積極的な手段を使う奴って珍しいだろ？」

弟「うん…」

妹「確かに…」

俺「きつとそいつも勇気を出してしたことなんだ。だったら、行くだけでもそいつの勇気に応えるべきじゃないのか？」

弟「なるほど」

妹「…兄ちゃん、初めて兄らしいこと言ったね」

俺「俺はいつもお前の兄ちゃんですよ…」

妹「ありがとね！ 私今から行ってくる！」

弟「おう」

俺「気をつけてな」

タッタッタッ

俺「ふふ…」

弟「くっくっ…」

俺・弟「はははははははは…！」

弟「お、おもしろ過ぎるｗｗｗｗ」

俺「わ、笑いすぎて腹痛えｗｗｗｗ」

弟「しかしここまで上手いくとは思わなかったなあ」  
俺「そりゃそうだろ――」

まさかあのラブレターが俺達による偽装だとは流石に分からん  
さ！」

弟「兄貴からこの計画聞いた時は驚いたけど」

俺「驚いたのは俺の方だつて。まさかお前がユウに仕返ししたいって相談してくるなんてなあ」

弟「楽しみにしてたプリン食われててさ……」

俺「食べ物の恨みって怖いな」

弟「ところで、俺がユウの机に入れたあのラブレター」

俺「ああ、俺が書いたやつね」

弟「女の子みたいな字で意外だった」

俺「見たの！？」

弟「あー、うん……」

俺「いつ――」

妹「どういつと？」

俺・弟「！？」



## ラブレター騒動 前編（後書き）

今回は大変長かったので前編後編に分けました。  
いい感じにオチがあって終わった感じですが、次回あり得ない方向  
に急展開します。

## ラブレター騒動 後編

妹「どういうこと？」

俺・弟「!？」

俺「行ったんじゃなかったのか！ というより、いつから聞いてた!？」

妹「『食べ物の恨みって怖いな』から」

弟「なんて微妙なところから…！」

妹「ねえ、どういうこと？」

俺「（まだよく分かってないみたいだ、どうする!？）」

弟「（俺に任せてくれ兄貴）」

俺「（頼もしい…、任せた!）」

弟「あのラブレターは兄貴が書いたんだ、ユウ」

俺「ちょおおおおおおおおおい!！」

俺「（何、全力で責任押し付けてんだコノヤロウ!！）」

弟「（安心してくれ兄貴。骨は1つくらい拾ってやる）」

俺「（え、何、俺死ぬの? …って、全部拾えよ骨!？）」

妹「そっか…。兄ちゃんが…」

俺「ひいっ…！」

妹「わかった…。じゃあ先に待ってるから、公園で」

俺「は？」

タッタッタ

弟「これは…」

俺「どどどどういうこと！？」

弟「落ちつけ兄貴」

俺「なんであいつ、あんなにしおらしかつたの！？」

弟「勘違いしたんじゃないかな。いたずらじゃなくて本気の告白だと」

俺「うおおおお！　なんでこんなことに…！」

弟「ははは、ついてなかつ――」

俺「お前のせいだろ…！」

弟「でもユウ、満更でもなさそうだったよ？」

俺「はあ！？　第一俺達、血の繋がった兄と妹だぞ！？」

弟「兄貴。こんな言葉がある」

俺「何？」

弟「愛は血縁をも越える」

俺「！！」

弟「心をときめかせている女の子の期待を裏切るのか？」

俺「……。」

弟「世間体ばかり気にして、自分の気持ちに嘘をついてないか？」

俺「俺は……」

弟「兄貴、行ってやってくれ。ユウのためにも」

俺「アキラ……お前……」

弟「幸せになれよ、兄貴。（優しい目で）」

俺「わかった！！ 行ってくる！！ うおおおりやあああああ！

！」

タッタッタ

弟「さて、行ったか」

ガラガラガラ

妹「御苦労様」

弟「くっくっ……」

妹「うふふ……」

弟・妹「あははははは!!」

弟「あ、兄貴www」

妹「ば、馬鹿過ぎるwww」

弟「しかし、あの兄貴がこうも簡単に引っ掛かるとはな…」

妹「いや、引っ掛かるでしょ。」

自分と組んでると思ってる弟が実は妹と組んでたなんて普通わかんないよ」

弟「そうだけどさ。いやしかしユウが俺に『兄貴を懲らしめたいから手を貸してくれ』って言いに来たときは驚いたわ」

妹「私達つてさ、昔から兄ちゃんに酷い目遭わされてるじゃない？」

弟「数えられないくらいな…」

妹「自宅の風呂に塩めっちゃ入れて『死海を作ったZE』とかほざき初めて、私達無理矢理入らされて…」

弟「あれはもう伝説だよな…」

妹「他にも沢山あるよね、伝説…」

弟「最近のは『山葵苦鬼』だな」

妹「美味しかったよ？」

弟「あのクッキー、ダイオキシンの致死量高いのに!？」

妹「大袈裟」

弟「(いやいやいや! あれは本当に死ねるって!!)」





妹「なんか自分でも何やってんのかわからない」

俺「俺が練りに練った作戦だからな！ 気づくのは俺ぐらいだよ」

妹「しかし本当良くできたシナリオだね！ アキラも驚いてたけど、更に先の展開があるなんて絶対わかんないよ！」

俺「それほど俺のアイツへの恨みは強いのか……」

妹「やっぱりなんかあったの？」

俺「俺が寝てる時に！ 俺の顔に零距离から屁こきやがった……！」

妹「下品！ 話が下品……！」

俺「その時のアイツの顔ときたら……！ なんと憎らしかったことが……！」

妹「そこから壮絶な復讐が始まったと……」

俺「アイツにもしんじていた奴に騙されたとわかったときの屈辱を味あわせたい……！」

妹「その屁にはそんな負のオーラがこめられてたの……！」

俺「しかし、アイツのあの熱演には笑ったな！ 誰がコロリだ……！」

あんなので心変わりするかよ……！」

妹「本人、結構自信満々の演技みたいなこと言ってたけど」

俺「俺がアイツごときに騙されるわけないだろ……！」

妹「そんな、唾とばしながら熱く語らなくても」

俺「とにかくユウ。協力してくれてありがとう」

妹「どういたしま……」

俺「だが、俺の耳には何やら俺の悪口らしき言葉が聞こえてきたんだが……」

妹「あれは……だ、騙すために仕方なく……！」

俺「ま、いいや。あとはあの馬鹿が騙されたことに気づいて戻ってくるのを待つだけか」

妹「……携帯に電話してネタバラシしたら……？」

俺「却下だ」

妹「却下か」

それから弟は30分後に帰って来ました。

玄関でニヤニヤしながら立っていた俺達の顔を見た時のアイツのリアクション

「えっ、ちょ、何、どういうこと？ は？ なになになに、なんで！？ 俺……。ああああああ騙されたあああああああああ  
！！」

## ラブレター騒動 後編（後書き）

今までとは違い、会話というよりストーリーの流れ自体をコメディにしました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4816r/>

---

「姉が欲しい……」 三兄妹の長男談

2011年11月16日12時57分発行